
闇夜に佇む純白の彼女は語り継がれる

櫻居白鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜に佇む純白の彼女は語り継がれる

【Nコード】

N6263K

【作者名】

櫻居白鹿

【あらすじ】

処女作です。

見て見ぬふりをして下さい。

ウソです（笑）

感想をお待ちしておりますので、どうかお願い致します。

(前書き)

初めまして

さくらい びやつか
櫻居白鹿と申します

処女作故に乱筆乱文ですが、どうぞよろしくお願いします
出来れば、感想をお願い致します

これは、とある少年が体験したお話。

とあるド（が付く程なにもない）田舎に少年が居ました。

彼にはコレと言って、特異な人間ではありません。

田舎に住んでいて、妹が3人いる、家族円満な家庭に暮らす、少し家から離れた高校に通うごく普通の学生でした。

彼の通っていた高校は、可もなく不可もなく進学校とはいい切れない普通の公立高校。

自宅から通うには、朝6時40分に家を出て、最寄駅まで自転車で行き、7時09分の電車に乗る。

学校に着くのは、8時10分。

一日中授業を受けて、部活に所属していない彼が帰宅するのは6時頃。

ゲームして、テレビ見て、親に勉強しろと言われ、宿題だけして（予習なんて堅苦しいことはせずに）、寝る。

どこにでもいる普通の少年。

三年生になって、進学する彼は、周りの友人と同様に予備校に通う事になった。

帰る時間が10時を過ぎる事もあったが、「まあ受験生だし、他の子も皆そうだから…」と本人は割り切っていた。

そんなある11月の事。
そろそろ受験戦争が始まる頃だろう。

いつも通り、彼は予備校から自宅へ帰宅途中だった。

既に時計の針は10時を回っており、辺りは墨汁をブチ撒けた様な、鬱蒼とした暗闇が広がっている。

民家は集落ごとに固まり、半分の家屋には既に灯りが無い。

街灯はあるものの、500メートルに1台程度しかなく、余計に暗闇を不気味なモノに変えていた。

勿論、こんな夜中に動いている光は、自転車を漕いでいる彼が、残業で遅くまで残っていたであろうサラリーマンの車のテールランプぐらいだ。

空を見上げれば、オリオンのベルトと北斗七星が見える。

地上に何も無いおかげで、晴れた日は年中プラネタリウムが出来るのが、ちょっとした彼の自慢だ。

流石に季節はもう冬で、学生服の下にジャージを着ていないと、洒落にならない。

自転車を漕ぐ彼の息は、蒸気機関車の様に、白い煙を吐いている。もうすぐ、ここら辺りでも初雪が観測される頃だ。

「さっむ…」

誰に言うでも無く、漏らした彼の愚痴は、墨汁の中に沈んでいった。

今年の春に誕生日プレゼントとして貰った音楽プレイヤーで、流
行りのロックを聞きながら、家で待っているであろっうあったかい食
事を想像して、彼は家路を急いでいた。

今は丘（地元では小山と呼ばれていて山頂に忠魂碑が祭つてある）
に隠れていて見えないが、次の橋の手前の道を右に入ると、もう自
宅が見える。

あと一分もしない内に、愛しいストープに抱きつけるだろう。

ところで、知っているだろうか。

人間は、目標に到達する直前や、危険から開始切れると分かった瞬
間が、一番気が緩むらしい。

トンネルにおける自動車事故で一番多いのは、トンネルを抜ける辺り
らしい。

心理学的にも、周辺からのプレッシャーが消えた瞬間が、気が緩む
傾向があると統計で出ているそうだ。

そして、彼も例外ではなかった。

彼の頭の中には、今日帰ってから寝るまでのヴィジョンで、頭がい
っぱいだっただ。

普段は大人しめの彼も、心の中はプールに入りたがる小学生並にデ
ンションが上がっていた。

意気揚揚と自転車のハンドルを右に切った瞬間に、彼はブレーキを
かけざるを得なかった。

突如として彼の前に白い壁が立ちはだかったからだ。
彼の眼は、ここまでの道程のせいで、暗闇に慣れ過ぎていたようで、目の前にあるモノを認識するまでに時間がかかった。

どうやらソレは、鹿の群れの様だ。

彼にとって鹿は珍しくも無い動物だ。

小学校の頃、授業中に校庭に鹿が出現した時だって、先生だって「また、鹿か…」なんて言って、そのまま授業を続けるくらいし。祖父の友人で近所の猟師の人に鹿肉を貰って食べた事もあった。こうして遅い時間に帰っていると、道沿いの川に水を飲みに来ている群れにも遭遇する。

もし彼が鹿を見たら、たぶん都会の子が、野良猫を見る時と同じリアクションをするだろう。

しかし、彼の行く手を阻んだ鹿は、今まで見た事が無かった。

純 白

一転の曇りも無い「白」。

真っ白な牝鹿と数頭の親子だったが、彼の眼には白い牝鹿だけが飛び込んできた。

自転車のライトに照らされて、彼の真っ暗な視界に突如として現れた彼女は、彼の網膜を焼けつけてしまった。

せいぜい白い鹿なんて、酒のパッケージで見たくらいだ。

実物の白い鹿など、見た事がなかった彼には、それが普通の動物には見えなかった。

鼓動は一気に跳ね上がるが、呼吸らしい呼吸はしていない。

急ブレーキをかけ、喧しい摩擦音が辺り一帯に木霊したにも拘らず、彼女は一向に動こうとしなかった。

やがて、自家発電のヘッドライトが消えていくが、彼女はまだ動こうとしない。

そのまま時間だけが、流れる。

彼（達：少なくとも彼に）にとっては、ほんの一瞬の出来事だった。

突然、彼の携帯から音が鳴り響いた。

その音に驚いたのか、彼女の取り巻きが逃げ出し、後を追うようにして彼女も暗闇へと溶けていった。

彼は携帯を取り出しディスプレイを眺めた。

母親からの電話だった。

時計を見ると、11時前。

どうやら心配してかけてきてくれたらしい。

余りにも帰るのが遅く、先程のブレーキ音がしたから、もしや事故でもしたのかと思い連絡したらしい。
しかし、母親はブレーキ音を聞いてしばらくしてからかけたと言っている。

おそらく彼は、5分近く白い彼女と睨めっこしていた様だ。

「心配ない、もう家の前だ。すぐ帰る」と母親に伝え、電話を切つて、再び重いペダルを漕ぎだした。

家に着くと、そこにはいつもの日常が待っていた。

温かいご飯。少し酔った父。洗濯物を畳む母。風呂の入る順番で、もめている妹達。

彼はほつとして、ようやく夜食にありつくことができた。

白米を胃に流し込みながら、先程あった事を父親に打ち明けると、思いもよらぬ答えが返ってきた。

ここら辺りには、昔から白い鹿が居たらしい。

父親も、そして祖父も遠い昔に見たらしく、近所の男児達は成人するまでに一度は見るものらしい。

後日、公民館にて。

「大人になる過渡期に目撃される事が多い事から、成人の儀式みたいなもんだ」と近所のオジサン達は口を揃えて言われた。

しかし、彼等は決して他の地区の人間にこの事を言わないそうだ。

「別に、崇めているわけではないが、神様みたいなモノだからなお前も見ただから解るだろうに。すべてを超越した様なあの姿を…」と、猟師のオジサンも彼女を仕留める気は無いそうだ。

その日の公民館では、彼女の話で持ち切りだった。

皆で、何時何処で出逢ったかを語り合った。

酒の肴には持つて来いの話題で、彼もオジサン達に飲まされ、潰されたのはいい思い出になった。

彼（そして彼等）の中で、彼女は行き続けている。

時代と共に人は変わるが、彼女への価値観はいつの世も同じように、新しい世代へ受け継がれて行く

そして、新しい世代の子供達も…

きっと、彼女に出逢うのだろう

完

（後書き）

読んで頂いた方々へ

先ずは、ありがとうございます。

初めて書かせて頂いたので、どうすればよいか全く解らず、只々情熱を注ぐだけの荒削りな内容で、申し訳なく思います。

内容なのですが、ほぼ100%実体験を元に書かせて頂きました。共感して頂けるとありがたいと同時に恥ずかしいです。

今後も単発で、上げさせて頂きますのでよろしくお願い致します。

良ければ感想をお聞かせ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6263k/>

闇夜に佇む純白の彼女は語り継がれる

2011年1月27日08時58分発行